

講習会では実機を体験できる貴重な場

情報化施工を普及させるには、多くの人に体験してもらい、使いこなせる技術者を育成することが欠かせない。今回は、実機を体験できる貴重な場である講習会や見学会について取り上げる。(本誌)

情報化施工の普及に当たって、大きな問題となるのが技術者の育成だ。現状では、情報化施工の機器を自在に使いこなせる人材はまだ不足している。

また、普及を促すには、情報化施工に対する理解を深めることも欠かせない。まずは、機器を実際に使って親しんでもらうことが重要だ。重機は高価で台数が限られるので、操作を試せる機会は多くはない。機器メーカーやシステム開発会社、各種団体などが開催している講習会は、情報化施工を実体験できる貴重な機会だ。

施工管理者向けと作業員向け

情報化施工の講習会には、(1)教室内での講義に加えて、測量機器の操作や三次元設計データの作成などを体験できる施工管理者を対象としたもの、(2)情報化施工機械の仕組みに関する講習を受け、実機の操作を体験できる作業員を対象としたもの——などがある。

講習会の主催者としては、機器や重機などのメーカー、リース・レンタル会社、システム開発会社などがある。ユーザーの拡大を目的に、これらの会社が無料で講習会を開催する場合もある。

また、日本建設機械化協会が開催する講習会もある。静岡県富士市にある研修センターでは、重機に搭載するデータの作成など各種講習のほか、実機を使った実習など多岐にわたるプログラムを用意している。

建設ICT導入普及研究会が実施する現地見学会もある。同研究会が取り組んでいる「建設ICT(情報通信技術)」の紹介から基本設計データの作成、ICT重機を使った個別の技術説明までをカバーする。

なお、これらの講習会情報は、建設ICT導入普及研究会の「建設ICT総合サイト」(<http://www.cbr.mlit>)



情報化施工機械の仕組みの説明や実機による施工モニター体験の様子



トータルステーションを使った測量の体験実習。現地測量から出来形管理までの一連の流れを体験する

go.jp/kensetsu-ict/)に掲載しているので活用してほしい。

講師の育成にも注力

次に、建設ICT導入普及研究会の取り組みを紹介しよう。

同研究会では、各種課題に個別に対応するワーキンググループ(WG)とプロジェクトチーム(PT)を設置している。そのなかの「技術者育成PT」が、技術者育成の方策を検討し、その実施に当たっている。

発注者側の職員向けには、「技術者育成プログラム(案)」を2010年3月に制定し、技術者育成を計画的に実施している。具体的には、事業を担当する各事務所が建設ICTモデル工事を活用した勉強会を開催しているほか、中部地方整備局が実施する職員研修のなかで、同研究会の取り組みを紹介している。

また、建設ICT勉強会や監督検査職員研修を企画・実施。建設ICTを普及させるため、講師の育成にも力を入れている。

受注者側の技術者や技能者に対しては、これまで2年余りの活動経験を生かした建設ICTの手引き書「ざっくりシリーズ」などを作成している。これらは、建設ICT総合サイトからダウンロードできるので、ぜひ活用してほしい。

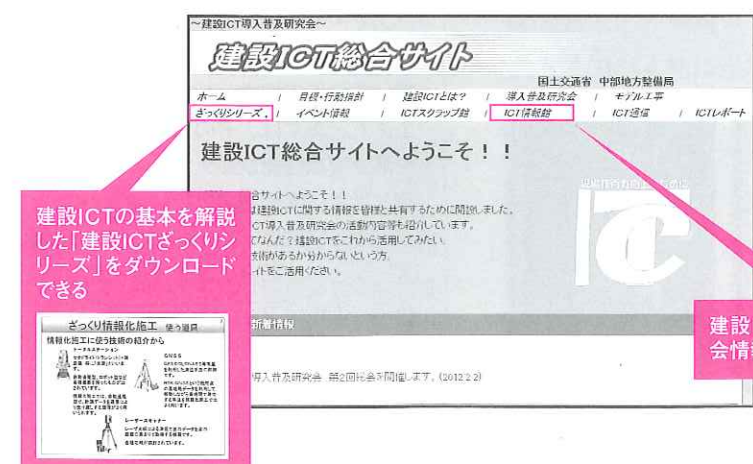
技術者育成で「使えるツール」へ

技術者育成で重要なことは、技術者や経営者、発注者など全ての関係者の意識改革だ。コストの高さだけ



出来形管理用データの作成実習

建設ICTに関する総合サイト



建設ICTの基本を解説した「建設ICTざっくりシリーズ」をダウンロードできる

建設ICT関連の講習会情報を紹介

でなく、「食わず嫌い」で情報化施工の導入に消極的な場合もある。まずは、施工や業務の効率化と品質向上を目標として明確に掲げ、積極的に情報化施工を活用していく動機付けが必要だ。

情報化施工の各技術は、目的を果たすための手ごろなツールになって初めて、普及した技術と言える。そのためには、ハードとソフトで個々の技術を開発するだけでな

く、使う技術者が情報化施工の導入が生み出す新たな価値への理解を深めなくてはならない。

情報化施工技術を「使えるツール」にするには、目的意識と技術力を向上させる技術者育成が鍵を握ると考えている。

(建設ICT導入普及研究会)

建設ICT導入普及研究会は、国土交通省中部地方整備局が設立した研究会。学識経験者、官公庁、建設会社や機器メーカーなどで構成する。